あります。

絵の残り方や板材の傷みからみて屋外に曝されていたものとは考えられず、当初は「加耶吉利堂」内で本尊馬頭観音の厨子を囲むように壁面に配されていたものと想像されます。

2）両界曼荼羅　絹本着色　掛幅装　二幅　本紙法量　縦104.5　横93.0　南北朝時代末

密教の教義を視覚化してあらわしたもので、大日如来の慈悲の世界を胎蔵界曼荼羅があらわし、知恵の世界を金剛界曼荼羅があらわしているとされるもので、あわせて両界曼荼羅といい、弘法大師空海が中国の唐から将来したといいます。本図はその縮小版にあたりますが、輸入品であったとされる幅広の絹地に岩絵の具や金箔によって描かれたものであり、大日如来はじめ多数の尊像の細密な図容を丁寧な筆致と賦彩であらわし、金・朱・緑青・群青などの諸色の対比も鮮やかな本格的な密教絵画としてまとめられています。面長でやや平板な印象にあらわされる大日如来の面相は宋風仏画の影響かとみられるので、制作年代は14世紀末から15世紀前半が推定されます。

毘沙門

胎蔵界曼荼羅では、中台八葉院の左右に配される金剛部院と蓮華部院の諸尊像を割付けて、一部は下書きまでおこないながら、その間隔を大きく取りすぎたために全体が絵絹の横寸法内に収まらなくなり、結局上塗りして描き直しています。どうした手違いかはわかりませんが、曼荼羅図制作の過程を知りうる点では興味深いものです。

本図のように小型に分類される両界曼荼羅は、伝法灌頂をはじめ、無病息災・延命調伏など各種の密教修法に用いられたとされます。

小王身

3）神馬図絵馬　板絵着色　額装　二面　画面法量　縦150.0　横180.0　慶長十一年（1606）

横板を五枚継いで画面をつくり、黒白それぞれの馬を太い墨線で巧みに描きおこしています。白馬が鬣を結い、左足も軽やかに穏やかな歩様に描かれるのに対して、黒馬は頭を激しく振って鬣もおおいに乱れ、後足を強く蹴り上げる「あばれ馬」の態にあらわされています。この黒神馬には夜な夜な画面から抜け出して田畑を荒らすという伝説があるほど、その描写は生き生きとして躍動感にあふれていますが、残念ながら絵師の名は伝わっていません。小菅権現に奉納された絵馬であることから、黒白の体色にはそれぞれ祈雨と止雨の願いが込められており、水を司る神としての信仰につながるものです。

なお、寄進者とされる皆川廣照とその弟廣泰は松代海津城主松平忠輝の家臣であり飯山城代でした。

4）花鳥図絵馬　額装　画面法量　縦90.0　横134.0　嘉永二年（1849）

画面中央に岩塊をあらわして、その周囲に咲き乱れる紅白あるいは薄紅色の牡丹をあしらい、岩上に

は羽毛色鮮やかな雌雄の錦鶏を、そして岩下にはタンポポと山鳩数羽を描いています。伝統的な花鳥画のモチーフにしたがったもので、岩絵の具の朱彩と緑青や群青との対比、あるいは牡丹の白など配色も美しくまとめられています。開花した牡丹のさまといい、鳥の姿態といい、その描線はおのおの特徴を捉えて見事であり、なかなかに絵師の力量が高いことを示しています。裏面の奉納者には「佐久間伴右衛門源普」の名がみえます。伴右衛門源普は飯山藩士であり、江戸に出て谷文晁の弟子であった鏑木雲潭に師事して花鳥画を修め、師匠の一字をもらい雲窓を号したといわれています。したがって、本図の作者が佐久間伴右衛門であった可能性は高いと考えられます。

金剛界曼荼羅

また、裏面の墨書銘は本図奉納の事情を伝えてきわめて貴重である。これによれば奉納の二年前、弘化四年（1847）におこった善光寺地震のため被災した飯山城下の家屋修復にあたり良材なく窮していたところ、小菅山別当英真法印の計らいにより山木数百本の提供を受けることができたとし、これを小菅の神恩と感謝してささやかながら本絵馬を奉納するとしています。

5）十六善神図　紙本着色　掛幅装　本紙法量縦176.0　横213.5　江戸時代中期

大般若経を守護する護法の善神を描くものです。国家安泰・五穀豊穣・病気平癒などを祈って大般若経を転読しておこなわれる大般若会においては、中央に釈迦・文殊・普賢の三尊をおいて、これを左右から善神たちが向き合う形で囲む配置が本尊形式とされます。釈迦如来以下の群像を一幅の絵にまとめて描かれるものが通例ですが、本図では左右幅の善神像が継ぎ足されて一幅とされているので、もとは中央には今は失われた釈迦三尊幅があり、三幅一具をなして、法会のときには横長の大画面をなしたものと推定されています。

胎蔵界曼荼羅

本図の十六神各尊は個性豊かに描き分けられ、やや大胆で素朴な筆使いながら彩色も鮮やかに残るもので、江戸時代中後半に作られたものとみられます。向かって右の諸神中に女性神が配されるのは珍しいです。尊名までも墨で黒く塗り込む背景部には傷みなどの相当な理由があったからでしょう。元隆寺の別当であった大聖院の旧物とされ、その後継となる菩提院に伝存しています。

6）「信濃国高井郡小菅山絵図」　紙本著色　本紙法量　縦117.2　横121.0　延享三年（1746）

元隆寺域の山林改めのために作成されたと記される。現観音堂がみえないことや元隆寺の塔や堂舎・塔頭などの伽藍のさまからすると中世盛時を復古的に描いたものかと考えられます。

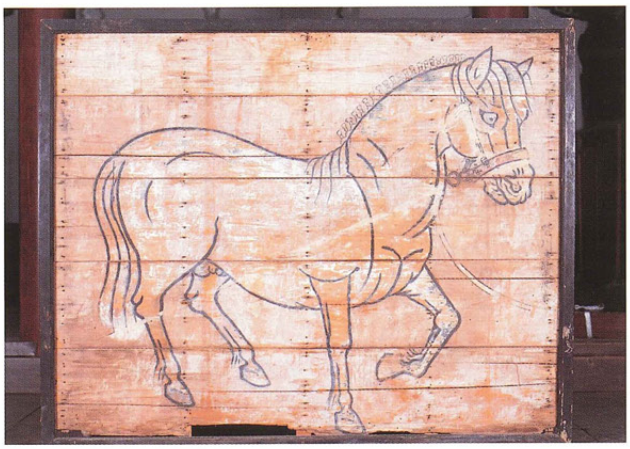
3　工芸など

1）鳳凰透彫り脇立　木造彫刻彩色　外形法量縦74.9　横32.1　厚1.1　天文十五年（1546）

「竹に鳳凰」と「桐に鳳凰」の二面があります。竹木と桐木に留まる鳳凰のさまを半肉透かし彫りとしてあらわし、彩色を施しています。竹図の下地板には金箔を捺し、室町時代後期の工芸品としても貴重です。裏面の銘文から天文十五年（1546）の造立と知られ、「奥社脇立」と記されるので奥院内陣空間を飾るものであったと思われますが具体的には不明です。

2）鰐口　銅鋳造　径16.8　厚5.1　文禄二年（1593）

鰐口とは本堂正面の軒先に吊り掛け、その撞座には吊り下げた太い布縄などを当てて音を出すものです。本品は合わせ型による銅鋳造となるもので、外縁・内区と撞座はそれぞれ陽鋳圏線で区切られ、撞座内には尖った八葉の蓮弁形と、中心に蓮子一個を陽鋳しています。表面の銘文は陽鋳し、裏面の銘文は鏨による陰刻であらわしています。それによれば文禄二年（1593）に制作されたことが知られるので、当地方の鰐口の基準作としても貴重です。甲越の合戦も収まり小菅社奥院はこれより二年前に再興されているので、あるいは奥院に掛けられていた可能性もあります。本品は鰐口としては小ぶりのもので、古式を襲いながらも撞座の蓮弁形が尖るように中世末期の様式を示しています。



白神馬

黒神馬

十六善神画像

花鳥の図

竹方鳳凰文

桐鳳凰文

第４節　考古学から見た小菅

１　小菅の集落内を探る

小菅集落内においての考古学調査は古くから行われていましたが、発掘調査を実施したのはごく最近からです。

平成13年10月、学校法人文化学園の支援をいただいて大菅遺跡と小菅大聖院跡の試掘調査を行いました。この報告書は、翌年３月「大菅遺跡・小菅大聖院遺跡」として飯山市教育委員会から発刊しております。大菅遺跡は北竜湖の東岸にあり、中世の大菅集落があったとされ、近世にその一部が小菅に移り住んだとの言い伝えがあります。調査の結果は、平安時代や中世の遺物を若干発見いたしましたが、集落の痕跡までは把握することが出来ませんでした。

大聖院は、中・近世においては小菅山元隆寺の別当の住まいであり、当時の中核寺院であった場所です。礎石等も残されていることがわかり、そのまま保存することといたしました。

平成14年６月、県過疎地域代行道路建設事業に伴い仁王門の南側において発掘調査しております。この場所からは、建物跡２軒を検出するなど、中世農村集落の一部であると推定されます。

平成14年８月、国庫補助事業の市内遺跡発掘調査として大聖院跡を調査しました。これらは、平成15年３月に「小菅修験遺跡」、「市内遺跡―千刈・小菅大聖院跡・大菅」として報告書を発刊しております。

このように、ここ数年で小菅についての考古学的調査は進んできましたが、考古学的調査ばかりでなく自然や歴史・文化・民俗を含めた小菅全体の総合的な調査が必要とのことになり、国庫補助事業として平成15年度から二ヵ年事業で小菅総合調査が開始され、新たな視点で発掘調査を実施することとなりました。本稿ではその発掘調査の概要を報告します。

２　発見された遺構と遺物

１）既出遺構と遺物

区や神社、個人が保管されている資料を調査しました。

和鏡　小菅神社には三面の和鏡が所蔵されています（写真１・２）。そのうち一面は小菅神社奥社本殿修理工事の際に甘露池周辺から発見されたものと考えられます。鏡はそれぞれ8.55、7.1、5.4cmと小さなものです。鏡の裏に描かれている図柄から、それぞれ州浜松樹双雀鏡（すはましょうじゅそうじゃくきょう）、垣根柳樹双雀鏡（かきねりゅうじゅそうじゃくきょう）、菊文散双雀鏡（きくもんちらしそうじゃくきょう）と呼ばれています。州浜松樹双雀鏡は州浜の上に松樹が聳え、左に二羽の雀が遊舞する情景をあらわす典型的な室町期の擬漢式鏡です。垣根柳樹双雀鏡は、垣根越しに柳の樹が風に揺らぎその

写真１　州浜松樹双雀鏡（左）と垣根柳樹双雀鏡（右）

下に二羽の雀が乱舞する情景をあらわしています。こうした題材は鎌倉期のものにも見られるらしいですが、肉取表現から若干年代は下がると考えられています。菊文散双雀鏡は、全面に菊紋を散らし、上部に二羽の雀を配しています。また、小鏡で紐穴が空けられていない点から実用品でないとされ、上縁部に穴が穿たれていることから御正体として懸垂されたものであろうと指摘されております。

写真２　菊文散双雀鏡

以上のことから、これら三面の鏡はいずれも腐蝕が進んでおり状態は悪いものの室町時代の特徴を良くあらわしています。

鰐口（わにぐち）　鰐口は、神社や寺院のお堂の前に吊るして、参詣した人が太い綱で打ち鳴らすための一種の楽器で、内部は空で鈴をつぶしたような円形をし、下の方へ向かって口が開いています。鰐口の一面には「奉寄進金丸与八郎　于時文禄二葵巳任九月吉日」と陽刻されており、年代と奉納者が明らかです。文献によりますと、天正19（1591）年、奥社本殿は別当大聖院等が願主となって再興されたとあり、鰐口はその二年後に奉納されたことになります。金丸与八郎なる人物について調査は行いましたが、まだわかっておりません。

銭貨　江戸時代の寛永通宝が最も多いのですが、中世の中国から輸入された渡来銭も多く発見されています。日本においては中世全般にわたって使われていました。これらの渡来銭は江戸時代の寛永10年（1670）のお触書により使用禁止となって以降は流通しません。また、室町後期以降大量に流通した永楽銭など比較的新しい渡来銭がないことを考えれば、発見された渡来銭は、中世において使用されたものと考えられます。

土器　奥社本殿の工事等において、床下からかわらけ等が多く発見されています。これらの多くは内面に煤の付着しておりますので、それらについては灯明皿として使用されたものと考えられますが、あるいは護摩祈祷や特別な行事において使用されたとも考えることが出来るかと思います。年代的には、飯山地方でこうした轆轤使用で、底部に糸切り痕をとどめる小形のものは16世紀になってから多くなると考えられており、中世末から江戸時代にかけてのものと思われます。

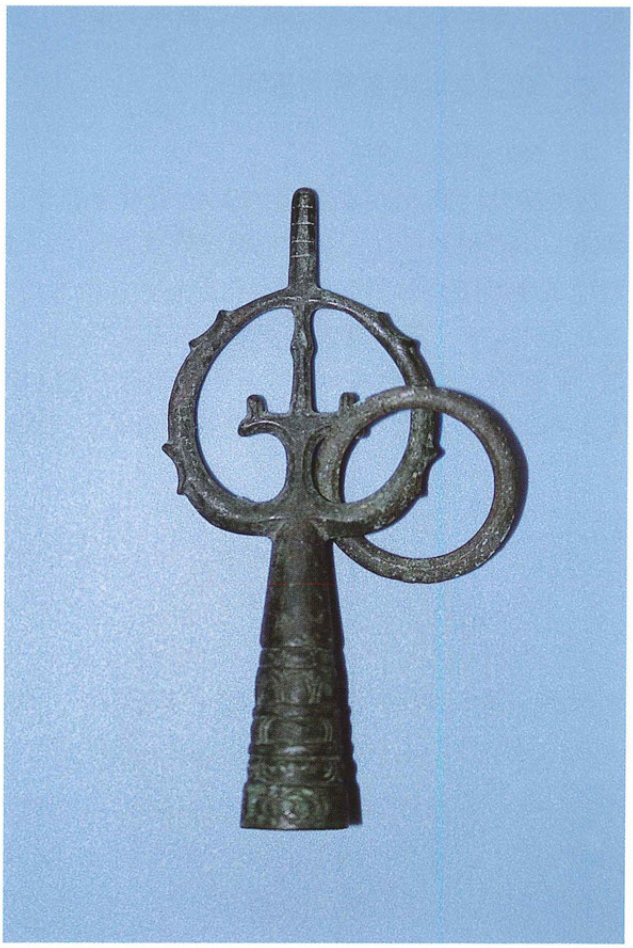


写真３　錫杖

錫杖（しゃくじょう）　小管住民の方が、自宅の庭の池を掘るときに発見されたとのことで、宗教的な遺物として大変貴重な資料で、錫杖の頭の部分です（写真３）。錫杖とはその名前の通り、杖の先に錫の環がついたものです。仏教僧、修験者の山野巡行の折などに用いられるもので、後には杖ではなく法要の梵唄に合わせて振り鳴らすなど用途が変化し

たようです。振ると「しゃくしゃく」音がするので名づけられたともいいます。本例は、杖の頭部で環の頂に宝塔を置き、現状は環がひとつだけですが、かつては左右三本ずつ計六環もしくは十二環あったものと思われます。沈線で蓮弁飾り等をやや省略して表現しています。

五鈷杵（ごこしょ）　変わった形をしておりますが、先端に五本の突起があり五鈷杵あるいは五鈷鈴といわれるものです（写真４）。密教の代表的な法具で、あらゆる煩悩を打ち破る堅固不壊の心を標示するといわれています。金剛杵は、杵形の把の両端に鈷（切っ先）をつけたもので、古代インドの武器にその源流をもつものと言われています。鈷の形式よってひとつのものが独鈷杵・三つになっていれば三鈷杵と呼ばれています。本例は、下方に鬼目と呼ばれる半球状の突起や二条の紐で括る蓮弁飾等細密な沈線で装飾しています。これも小菅修験遺跡を代表する遺物のひとつとして貴重です。

この錫杖と五鈷杵の年代は、特に錫杖などは各箇所いずれもかなり省略された形式となっていることから、中世末あるいは17世紀代の江戸時代前期に位置づけられるのではないかと考えています。

写真４　五鈷杵

懸仏（かけほとけ）　小菅の市村文昌さんが保管されていたもので、自宅敷地内から発見されたとのことです（写真５）。鋳造製の大変小さなものですが、背中の部分に突起状のものがあります。このことから懸仏ではないかと考えております。懸仏とは、仏像や名号・神像を円盤状にあらわし、神社・仏寺の内陣に懸けたもので、本例は穴があけられた和鏡などに取り付けられていたのではないかと思われます。この年代については、室町時代と考えています。いずれも信仰・宗教に関わる遺物であり、小菅修験の片鱗がつかめる貴重な資料です。

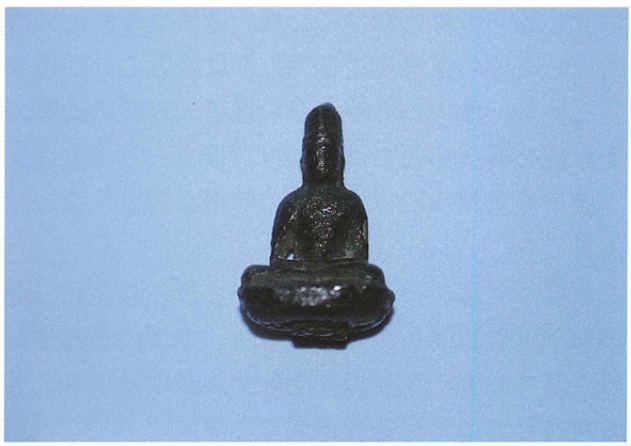


写真５　懸仏

２）発掘調査

大聖院跡及び周辺　大聖院跡とその周辺の調査は三箇所にて行っており、大聖院跡、池、護摩堂北、石段の各地点です。

大聖院跡は、調査の結果、礎石などが比較的よく残されていることがわかりました（写真６）。間口18間、奥行き７間の大きな建物で、厩跡や大釜跡、風呂跡、座敷など間取りもほぼ判明しました。建物の規模を見ても元隆寺の中枢であったことがよくわかります。なお、調査は一部においてトレンチ調査も行いましたが、礫が敷き詰めたような場所も発見されました。当初の目的が遺構の確認であり、より下層の古い時代の調査も興味あるところでしたが、逆に上の礎石等を破壊することにもなりますので、そのまま保存することとしました。将来の本格的な調査に委ねたいと考えています。

ここで発見されたものには、昭和30年代まで住まわれていましたので最近のものも出土していますが、江戸時代の食器類などが多く出土しています。銭貨は39点発見され、そのほとんどが寛永通宝と文久通宝ですが、中世の渡来銭が二点（天禧通宝・永楽通宝）出土しています。

写真６　大聖院跡

なお、中世にさかのぼるものとしては珠洲陶器が出土しています。珠洲陶器は、中世に能登半島の珠洲郡市周辺で焼かれた陶器で、壷や甕などが生産されました。その年代は12世紀から16世紀にかけてであり、さらに16世紀には珠洲郡内に流通がとどまったとのことで、この陶器が発見されたことは15世紀末頃までの年代を想定することができます。さらに、発見された破片は壷Ｔ種と呼ばれる珠洲陶器壷で、その年代は概ね14～15世紀と考えられます。珠洲陶器が出土したことで、この大聖院周辺は確実に中世まで遡ることが遺物からも証明されました。

写真７　池の調査

池地点の調査は、中世の痕跡が認められるかどうかを明らかにするため、池の中央に一本の調査区を設けて行いました（写真７）。池底面はほとんど浚われており、中央が約30cmの深さで堆積土が少し認められただけでした。そのため、池の堆積土から池の構築年代を明らかにすることが出来ませんでした。

しかし、中央の堆積土から近世～現代の遺物に混じり中世の珠洲陶器が発見されています。出土状態から池の構築年代に直接結びつけることは出来ませんが、その可能性は残されていると考えます。

護摩堂北地点ではかなりの範囲を調査しましたが、遺構や遺物において特筆すべき点は認められませんでした。

石段地点は、旧石段のタタキと思われる部分がかなり下層に認められています。中世の瓦器片も出土しており、現在の大聖院跡地が中世以降大きく変化している可能性があります。

写真８　観音堂跡の礎石

観音堂跡　地元では、現在の観音堂に対して「古（ふる）観音堂」と呼んでいます。奥社参道入り口から100ｍの地点にあり、明治27年に現在地の菩提院北に移転しましたがそれまで存在していました。旧観音堂跡には昭和50年代に観光施設として休憩所が建てられましたので破壊されたと思われていましたが、清掃を行ったところ礎石が確認でき、二間×二間の建物で入り口から周囲に回廊がめぐっていたことがわかりました。柱間寸法は210cmで、奥の張り出し部分こそありませんでしたのでその部分だけ相違していますが、その他は現在の観音堂の建物と規模は一致していることがわかりました。遺物は多くは出土しませんでしたが、遺構が残されていたことは大きな発見となりました。

講堂周辺　近世以降、講堂周辺において「市」が開催されていたことが文献からも判明しています。この時、講堂及び祭式場、参道周辺に「高見世」「飛さや」と呼ばれる店が出されていたようです。臨時的な建物である「飛さや」は、講堂と祭式場の周辺に48軒出されていました。こうした建物の痕跡を調べるために、平成16年９月確認調査を行いました。

５箇所の調査地区のうちで、現在の市神が建立されている付近の調査区から、「飛さや」と推定される跡が検出されました（写真10）。掘立柱建物跡の柱穴と推定されるもので、素掘の穴の周りに数個の平石をめぐらして四角い穴としたもので、「石組柱穴」とでも呼ぶべきものです（写真11）。遺構は近世面と考えていますが、石組み柱穴には後にモルタルで補強されていますので、明治あるいは大正頃まで使用された痕跡が伺えます。

遺物は近世以降、近・現代の陶磁器類を中心に発見されています。

写真10　「飛さや」跡

写真11　石組柱穴

３）小菅修験遺跡

小菅集落内を、中・近世の「小菅修験遺跡」として登録していますが、その実態についてはまだまだ不明な点が多いのが現状です。

しかし、中世遺物の検出や既出遺物の懸仏・錫杖、保管されている曼荼羅図などから、小菅は中世から近世の初めにかけてはそのような宗教都市であったことが言えるかと思います。その後、近世農村社会の中で飯山藩主等の庇護のもとに再建され、あるいは変貌しながら近・現代へと歩んだものと考えられます。今後さらに調査・研究を進めるとともに、現在の歴史的景観を保全する試みをすすめるべき時期に来ているように考えられます。

第４章　小菅の未来

地域の文化財から国民共有の財産へ

笹本正治

飯山で最初に話をしてから六年、小菅に通い始めてから五年が経ちました。小菅に行けば行く程、小菅に魅せられます。それでは小菅の良さはどこにあるのでしょうか。

その最大の魅力は自然と解け合った集落の美しさです。小菅には自然に対する畏敬の念を持ちながら、自然と共に歩んできた日本の集落の典型があります。小菅山の山懐にいだかれ、周囲を耕地で囲み、家々が中心部に集中する景観は、一つの宇宙を示しています。

小菅神社奥社への参道を歩むと、杉の巨樹の間からの木漏れ日が、神の眼差しのように注ぎます。足下の苔むした石畳は、多くの人を神の世界に誘った歴史を実感させます。さらに周囲に点在する巨石は、神が宿ることを感じさせます。天をつく巨木は神が降臨するアンテナです。日本人が神を感じようとした要素のすべてがこの地に維持されています。

厳しかった冬が終わり、五月の連休が近づく頃、小菅の春は満開です。講堂前でも、奥社入口の鳥居の前でも枝垂桜が、瀧の水のように天からピンクの花を滴らせます。少し山にはいるとカタクリの花が可憐な姿で迎えてくれます。やがて、周囲の山々の燃え立つような緑が眼に飛び込んできます。

集落から五分ぐらいの場所にブナの林があります。特に紅葉したブナの美しさ。これだけ人家に近い場所で、こんなブナ林に会えるなんて思いもしませんでした（写真１）。

小菅で始めて、雪の重さと、美しさ、荘厳さにも出会いました。

ともかく、いつ来ても、どこを切り取っても小菅は実に美しい集落です。この集落の美しさは住民が作っています。小菅でもっとも魅力的なのは住んでいる人たちです。頑固な親父さんたち、陰でそっと支える奥さんたち、歴史を担った老人たち、未来を作る子どもたち、そして祭りの主役の若者たち、どの顔も本当に生き生きしています。そしてつきあえばつきあう程、それぞれの人の人柄に吸い込まれます。

写真１　ブナ林

小菅には長い歴史に裏打ちされた独自の文化があります。小さな子どもたちまでがごく自然に神の前にぬかずき、玉串奉奠をする姿に驚きました。自然に形成された神への接触が里宮の景観や、奥社の建物を維持し、柱松神事を続けている根底にあるのだと思います。祭りの時に食べるえごも、日本海と深いつながりを持つこの地域独自の食文化です。人びとの言葉にも、道具にも、物腰にも地域の伝統がこめられています。

こうした中で目立つのは助け合いの心です。集落の共同作業をこの地では御伝馬と呼びますが、様々なことが御伝馬でなされます。用水路の確認、集落の道の掃除、そして柱松神事。当たり前のように、誰の指示もないのに、一人一人が自分の役

割を認識して、作業が続きます。これは雪国の助け合いの文化の典型です。

でも、良いことばかりではありません。これだけの景観が残され、共同体が残されたことは、他所のように景観を変えるだけの投資がなされず、人口も増えなかったことによります。足りないものの代表は、若者と子供です。彼らがいなくては地域の活性化もありません。なぜ、人が少ないかといえば、ここには職場が無く、職場を求めるとすれば町の中心部か、さらには長野市の方面に向かわなければなりませんが、そうなってくれば何もこんな遠くでなくても、職場に近いところに住めばいいということになります。

人が少ないことは一般的な意味での娯楽環境も提供されないことを意味します。遊びたい若者や子供などが楽しむ場もないんだったら、都会で楽しもうということにもなります。何よりも親としては子供の将来を考えて、もっと高等学校や大学が近くにある地域の方がよいということにもなります。

今、小菅は伝統的な文化と、それを支えるべき人たちの減少、離反との間で揺れ動いているように見えます。その中で気になるのは、住民が本当に小菅の良さを理解し、豊かさを享受しているかです。他所に出て行く人も、何とひきかえに小菅を出て、何を得るのかをしっかり認識していないのではないかと思いことです。

先ほど上げてきた小菅の良い点を維持していくのには住民の努力が必要です。何もしないで景観が守られたり、文化がつながったりはしないのです。伝統を守るためには、何か伝統で、どこがよいのかを認識しなくてはなりません。でも、私たちは日常生活で空気の大切さ、命の水の重要性を忘れ、あるものとして当たり前に思うのと同様、環境の中に入ってしまうとそれが当然で、特別なものとして認識しません。

まずは、この地に住んでいる人たちが小菅のどこがよいのかをしっかり認識しましょう。小菅の住民たちがよいと思わなければ、他所の人たちがどれだけ小菅を素晴らしいといったところで、何も変わってはきません。小菅のどこが良いのか、どこが悪いのか、どうすればもっと良くなるのかを、一人一人が考えてみたいものです。特に、何故このような総合調査まで行われるのか、なぜこんなに多くの研究者がこの地に引き付けられるのかを、住民の側から考えてみてください。このような総合調査が行われる場所は、全国でもそんなにありません。これが実施されていること自体、この地が宝物であることを示しています。

良い点はしっかり主張していきましょう。テレビではコマーシャルが流れ、都会は自己主張をして、人を呼び込みます。小菅の良さは誰一人主張しません。素直な子どもたちだったら、都会の方がよいと思うのは当然です。でも、小菅の皆さんが小菅を大切に思うのなら、その思い、小菅の良さを、子供や孫に伝えねばなりません。小菅の良さを相対化した上で、都会と比較し、ここを去れば何を得られ、何を失うか、それは人として生きる時にどのような意味を持つか、じっくりと語りたいものです。それができるようにするためには、親が小菅を知らなくてはダメです。

私たちはこれまで便利さを最大の美徳としてきました。歴史の進歩とは人間が楽ができることだとしてきました。しかし、多くの文化はその便利さと反対のところにもあります。集落で多くある共同作業は個人の自由を束縛するとして、嫌う若者は多いはずです。小菅にいたら付き合いだけでも大変だ、都会の方がずっと楽だ、そう考える若者もいるはずです。何もこの雪深いところで生活しなくても、他所へ行けば雪がないだけでも天国だと思う人も存在します。小菅の民家は使いにくい、先生たちは古い家が素晴らしいというけれども、住んでいる側からすれば決して良くないという人もいます。小菅の棚田は綺麗だというけれども、棚田はあまり機械も入らず、効率も悪い、放置されるのは自然の成り行きだ、こう考える人は多いはずです。つまり、小菅の魅力とされるものが、全く逆の評価を住民から受けていることもまた事実です。

でも、都会では孤独死があっても、小菅では野垂れ死にすることはないでしょう。小菅の風景はどれ

だけお金を払っても都会では見ることができません。式のすばらしさはどれだけお金を払っても味わえません。これだけ素晴らしい仲間を、都会ではどうやって作ったらよいのでしょうか。

なぜこんなによその人は、小菅に熱中するのでしょうか。当たり前ですが、それだけ魅力があるからです。その魅力は住民が努力して守れば、住民とっても価値あるものなのか、そんなことはないのか、それも考えてみましょう。

今や小菅の魅力、景観、文化などは、小菅の住民だけでは守りきれないところまできています。柱松柴灯神事が三年に一度になったのも、経費の大きさと、祭りを担う人の減少によってでした。祭りの場となる大聖院跡の護摩堂も、もう持ちこたえられないところまできています。大聖院の石垣もはらんできています。柱松柴灯神事は県の文化財に指定されていますが、実態としては小菅の人たちだけが保存し、支えています。これが維持できなくなった時、文化財に指定した県はどのように思うのでしょうか。

県民にとって本当に大事な文化なら、市民にとっては当然、国民にとっても大切なもののはずです。地域の文化財、地域の文化を市民、県民、国民共有の財産としていく動きをしなければなりません。小菅の文化はそれくらいのことをしても良いだけの内容と価値を持っています。市民、県民、国民を巻き込んでの文化財保護をしていきましょう。そのためには先ず、地域住民が文化を楽しみ、その楽しみを他人にも分け与え、よその人に理解していただきましょう。その上で、小菅の文化が価値あると思った人から協力を得て、地域の宝物を維持していくしかないでしょう。

私は小菅の良さが全国に理解され、集落研究の一つの教科書にされ、それぞれの人が住む周囲にしっかり目が向けられ、地域の独自性が考えられるようになることこそ、小菅の未来だと思います。そのためには、小菅の主人公である住民の皆さんは、小菅に誇りを持って生活し、小菅の誇りを伝えていかねばなりません。小菅を全国の教科書にまで持っていくために、お互い努力していきましょう。

希望を作ることの大切さ

村山研一

小菅集落の近代の歴史を追っていくと、改めて戦後の高度経済成長が山村を大きく変えてしまったということがよく分かります。近代の日本は、スクラップ・アンド・ビルドによって新しい社会を作ってきたのですが、当然、棄てられてしまったものも多かったわけです。小菅も高度成長までは定常状態を維持していたように見えますが、よくよく考えてみれば大聖院の廃寺から小菅の近代は始まっています。

人口や生業の流れを追っていくと、小菅の集落は存続の危険水域に入りつつあるということが分かります。人口や世帯が減少していったのも、若い人々が将来を託すことのできる職場がなかったからです。高度成長の過程で日本人の間に拡がった「豊かな生活」を若い世代に保証するようなものが、小菅では用意できなかったということ、これが過疎化を招いた大きな要因だということは明確です。何も小菅だけに起きたことではなくて、日本のすべての山村に起きた出来事だったわけです。

しかし、1970年代の半ばから、事態は微妙に変わってきます。例えば、毎年総務省で行っている「国民生活に関する世論調査」を見ていくと、人々の要求が「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」に変わっていくのがこの頃です。恐らくは、調査をしている人も、調査に答えている人も、「心の豊かさ」とは何かということについては、具体的なイメージは何も持ち合わせていなかったと思います。しかし、大衆消費社会が飽和状態をみせて、「これは自分たちの求めていたものではない」と考えた人々が多く現れてきたということは確実にいえると思います。1975年には文化財保護法の改正によって「伝統的建造物群保存地域」の制度が作られています。古いもののスクラップ化に対する歯止めの方法が現れたということは、高く評価できると思います。

それから30年が過ぎて、事態が全く変わっていないのではないかという思いを持つ人は多いでしょう。でも、バブル経済の崩壊、工業空洞化、環境危機、少子化、このような現実に対峙して、事態が変わっているか、いないかではなくて、事態を変えていかなければならないところに来ています。「心の豊か

な社会」をこれから作っていかなければならないと思います。

小菅の自然景観、歴史景観、伝統行事は非常に価値のあるものだと思います。このようなものが「心の豊かさ」をもたらしてくれます。小菅のすばらしさは、近年になって認識されてきましたし、この調査がきっかけで認識がますます高まると思います。しかし、心配なことが二つあります。一つは小菅が「文化財」として認識されるとともに、住民の生活を無視して「保存せよ」という動きが出てくることです。「昔の町並み」といっても、一つの「昔」があるわけではありません。町並みは時間の中で変わっていき、実は色々な時代様式が共存しているはずなのです。重要なのは、ブルドーザーで町並みをスクラップして、全く新しい町並みをビルドしていくというやり方を止めるということにあると思います。住民の生活の中で、歴史的連続性を意識しながら町並みをどのように育てるかということが、本当の問題だとおもいます。住民がこれから、小菅の自然景観、文化景観をどのように育てていくのかということを柱にして将来の計画を作る必要があります。

写真2　集落入口の石造群

もう一つの心配は、これらの景観が「観光資源」として短絡的にとらえられてしまうことです。小菅の景観が観光客を意識してよそ行きのお化粧をしてしまうと、これまでの小菅ではなくなってしまうように思います。また、小菅の戦後の歴史を見ていくと、意地悪く見れば観光開発に一度は失敗したとみることもできます。同じ失敗を繰り返しても意味ありません。小菅の景観を地域の発展に結びつけていくためには、遠回りの道を辿ることが近道ではないかと考えています。

小菅の将来は、人口統計などを見る限り絶望的に見えます。ただ、絶望的に見えるのは、これまでの工業化のシナリオを念頭において数字の動きを見ているからに過ぎません。いまや、工業化のシナリオは破綻して新しいシナリオが必要になっています。そのシナリオがどのようなものであるかは、誰もはっきりと責任もって言えません。ただ、私は次のように考えます。これまでは、工場（あるいは大きな事業所）のあるところに人が集まってきました。しかし、大きな工場の多くは海外に移動しています。国内では人の集まるところがなくなっています。新しい流れの中では、人（人材という意味ですが）の周囲に新しい仕事は生まれてきます。そして、人は魅力的な場所に引き寄せられていきます。小菅の魅力を維持すること、育てること、このことが子供たちのＵターンや若い人々のＩターンにつながってくると思います。

一見、絶望的なデータを提示した私が言うのもおかしな話ですが、別に絶望することはありません。これから日本中が同じ様な状態になります。これまでの地域の歴史を振り返って、新しい希望を作ることが重要です。小菅ならばできると思います。

まなびの伽藍

土本俊和

調査に参加した信州大学工学部の学生たちにあつまってもらって、小菅の未来をかたってもらいました。工学部の学生たちは、おもに建物をはかるという調査をしました。しかし、単に建造物を実測したというのではなく、密度のこい時空間を小菅ですごしました。学生たちは貴重な経験をえました。とくに、人々やお祭りや景観にじかにふれることができたかとおもいます。では、いろいろでた声をひとつのながれにまとめてみます。

小菅の人は、あたたかく、したしみがあり、信頼感があり、隠しごとがなく、住民の意識のたかさは宝である。この意識はこれからもつないでいくべきで、人のよさに感謝したい。とくに、お祭りがすごく、これほどおおきな祭りをしていることはおどろきで、これからも、のこしていってほしい。単なるお祭りではなく、宗教とむすびついていて、その祭りの装置ものこっている。柱松の準備のとき、誰が指示するのでもなく全員でやっている。そういったことは、どこでもみられるということではない。また、景観がすばらしく、みごたえのあるのは奥社にあがる道で、これはすごく心にうったえてくる。戸隠とくらべると、スケールでは戸隠の方が上といえるが、景観では小菅の方がのこっている。住民の中で脈々とうけつがれた文化財がいきている。だから、インフラの一時的な整備などのために小菅がこわれてほしくない。

小菅の人々と祭りと景観を今のまま未来につなげていけたらいい。いまのいとなみが未来へ継承されていってほしい。小菅を観光地にする必要はないが、素朴な名所になればいい。

写真３　小菅集落

とはいえ、小菅にじかにふれることができただけに、心配になることもある。とにかく、後継者の問題があるから、これからは、まもっていくだけではむずかしいのではないか。高齢者がおおいので跡継ぎ問題が最重要といえる。人がいないと、何をやろうにも、維持したり、つくりだしたり、つたえたりすることが、困難になってくる。うけついでいくのは小菅でそだった中の一部の人だが、これからはまもるだけではだめで、うけついできた人がさらに創造しなければならない。いまいる人たちの思いをうけつげるような、わかい人が必要である。ただし、ただ民家がいいということで外部の人がはいってくるとよくない。しっかりと、うけついでいく仕組みをかんがえたい。

それで、まなぶという姿で小菅にはいっていく若者がいれば、いいのではないか。熱意のあるわかい人間がまなぶという姿勢ではいっていけば、いいのではないか。たとえば、あいている建物をとりあげて、地域連携の一環でそれを再生していく過程にて、小菅のいとなみをまなびとっていく。いとなみをまなびとるカリキュラムを一つ一つでやってみよう、ということである。とにかく、まなびとるという姿勢がないと地域がくずれるから、教育機関として大学がはいっていくのがよい。体験学習的にものづくりをやってみる。生涯学習的に老人と子供をふくめた「小菅のいとなみ大学」みたいなもの、あるいは、空き家を再生していって、集落のあり方をまなびとるとともに、再生した建物を「茅葺き学部」のようにいくつかのテーマにそってわけてみて、小菅の周囲の地区もふくめて、各所に点在させて、ブナ林や里山や棚田やアスパラガスや仏壇などをトピックスとしてとりあげていく。

これは、箱モノの建物をつくるというのではなく、空き家になってしまった母屋や小屋を再生していって、それを拠点としていくものである。建物を再生していく現場にて、あるいは再生された建物のなかにて、小菅のなりたちなどを、いろいろかたりあうことで、何をまなぶべきかをさとっていく。さらに、まなびとった事柄を、土間などに、ならべたり、つるしたりしていく。このように、空き家をいかして教育機関がはいっていくのがいいのではないか。これは、地域と大学の連携でもあり、わかい世代の育成でもある。

ふるい建物を再生する過程のなかで、まなびの伽藍を、古代の小菅にあったかもしれない、ちいさい山林寺院のように、再構成していきたい。そこで、日々のいとなみに即したものづくりの場をつちかい、はぐくんでいきたい。

2005年２月８日　信州大学工学部太田記念館二階　会議室
参加者：土本俊和 梅干野成央 岡本茂 松田真一 島崎広史 古川晴之 朱華方 早川慶春 鵜飼浩平
記録：岡本繁　まとめ：土本俊和

小菅の未来

小菅神社氏子総代会会長　蒲原良典

小菅の歴史は、修験道の開祖役小角が小菅権現を主神とする八所権現を祀ったことに始まり、以後小菅は山岳信仰、神仏両道の修験道場として栄え、多くの人々が訪れました。かつては戸隠・飯綱と並ぶ北信三大霊場として知られており、信仰の地としての歴史を今に伝えています。

小菅神社は、多くの貴重な文化財を有しています。これらは長い歴史のなかで、制作・寄進・奉納されたものです。小菅の地は、幾度か戦乱と復興が繰り返されるという波乱の時代を送ってきました。そのような中でも、小菅の文化財は先人たちによって大切に残され、現在まで受け継がれてきたのです。

近年、小菅も過疎化の影響で人口が減少し、老人世帯が多くなってきました。そのため、小菅集落だけで残された文化財を維持していくことは大変困難なこととなりました。私たちはこのままでは小菅の文化財が消滅してしまうのではないかと懸念し、何とかしてこれらの文化財を残していくための協力を市長をはじめ、市の行政に求めました。

以後、毎年行政懇談会が開かれ、小菅周辺地区の整備についての話し合いを重ねていきました。平成７年にはそれらの内容が具体化し、“大聖院跡地整備事業”が始まりました。そのなかで、平成10年６月、信州大学人文学部の笹本正治教授にお願いをして、今後の小菅集落および飯山市全体を考える上でのアドバイザーとなっていただきました。先生のアドバイス、また調査研究によって小菅の文化財は重要文化財であるという認識がなされ、その保存が考えられていったのです。

平成12年、“修験の里　小菅大聖院跡地研究委員会”が発足されました。文化財を残していくためには、まず調査研究から始めなければなりません。市から調査費が交付され、本格的に発掘などの調査が始まりました。また、笹本先生に中心になっていただき、小菅に関するシンポジウムや勉強会が毎年開催されることとなりました。平成13年には小菅の伝統的な大祭である、柱松柴灯神事を日本全体の祭礼に位置づけ、祭りの重要性を理解するための“柱松シンポジウム”が開催されました。

そして、平成15・16年と２ヵ年にわたり、国庫補助による総合調査が始まりました。また、信州大学各学部の先生方や学生さんにもこの総合調査に加わって、各分野における調査研究を進めていただきました。そのほかにも全国各地の諸先生方が小菅を訪れ、さまざまな分野にわたって調査をしていただきました。大聖院跡地、大聖院石段、石垣、庭園などの大聖院周辺の調査から小菅集落全土にわたって調査がおこなわれ、次々と小菅の文化が明らかになっていきました。

このような諸先生方、学生の方々、市のご協力により、小菅の文化財を後世に残していくための土台がつくられました。それと同時に、小菅の歴史・文化について新たな発見がもたらされたのです。こうして小菅の文化の見直しが図られるなかで、人手が足りず、継続も危ぶまれていた柱松柴灯神事も、近年はこの祭りのために帰って来てくれるふるさとを離れた若者や、小菅近隣の氏子の方々の協力で継続できるようになってきました。今現在、この柱松柴灯神事は、国の指定文化財に向けて全国に発信しているところです。

また、念願であった宝物の収蔵庫が“修験の里文化財収蔵庫”としてこのほど完成しました。収蔵庫の完成により、文化財の良好な状態での保存が可能になりました。また、収蔵庫を一般公開することにより、今まで眠っていた文化財を多くの人に観ていただけるようになります。これを機に、小菅集落や市民の方々はもちろん、全国の方々にも小菅について学んでいただきたいと思っています。また、収蔵庫を教育の場としても活用していただければありがたく思います。

小菅の文化財保護対策を懇願してから、およそ10年の歳月が経ちました。その間に多方面からのご協

力を受けて小菅文化財の保存と伝承のための事業が進められ、それと共に小菅全体の文化の重要性が認識されることとなりました。今までみえなかった小菅の姿が明らかにされたことにより、住民たちも地元小菅に、より一層誇りを持つことができたのではないかと思います。これも調査研究を進めてくださった諸先生方や学生の方々、市行政の賜物です。この調査において、大聖院の発掘調査地や現存する小菅の貴重な文化財を提供してくださった武内家、また各種助成事業のご協力にも感謝いたします。まことにありがとうございました。

写真４　柱松行事

こうして小菅の文化財の保存と伝承のための基礎ができました。これをもとに小菅・飯山の文化財として後世に残していくための活動をしていかなければなりません。長い小菅の歴史のなかで、文化財を守り抜いてきた先人たちに敬意を表する意味でも、私たちは彼らが大切に伝えてくれた小菅の文化財を将来に向けて発信し続けていく必要があるのです。

極私的小菅の里感傷散歩（50年代を記録する）

小菅の里保護委員会事務局長　鷲尾恒久

ゴンボの買出しに［一の鳥居］

かつて、千曲川左岸の大関橋のたもと、常盤大倉崎地籍に小菅神社の一の鳥居があったという。小菅からは、対岸となる。ここに小さなお寺があり、その名を小菅山美妙寺（浄土真宗本願寺派）という。

現在のような永久橋となる前、大関の板橋を渡って小沼へ行ったことがある。すぐ下を千曲川が流れ、その流れを見ているとめまいがしそうだった。横に渡された板がギシギシいって、真ん中しか歩けなかったことを覚えている。この板は、大水のたびに消防団員などが出て、取り払われたものだ。今の大関橋は、65年12月の完成だ。

一緒に行ったのが父であるのか祖父であるのか、今では覚えていない。目的は、越冬用のゴンボ（牛蒡）を買うためであった。兼子さんの家まで、歩いてkmほどの買出しである。小沼のゴンボは、千曲川の河川敷が生んだ地域の名産である。同じように、サゲエモ（木島地区坂井の芋＝里芋）も特産である。

参道を行く［二の鳥居］

関沢の地籍に、二の鳥居がある。木造であり、近隣では見られないほど大きなものだ。手前にある石灯籠は、信州高遠の石工の作だという。小菅神社と記された石柱が、参道入口を表している。

鳥居の北側は、現在瑞穂保育園となっている。映画「阿弥陀堂だより」では、樋口可南子先生の通う診療所となった。かつてはここに瑞穂小学校と瑞穂中学校があった。我が母校である。

２月生まれの私は、小さい方だった。専門が理科の担任の先生に連れられて、よく周囲の野山に出かけたことを覚えている。関沢山は、当時木が植えられてなく、冬になるとゲレンデとなった。

まだ小学生になる前のこと、父が手づくりのスキー板を作ってくれた。買うほどのお金もなく、長男の私にはお下がりもなく、父の手づくりのクリスマスプレゼントだったような気がする。自分で板を削り、先端は火の熱だか熱湯に浸けるかして曲げた。板が黄色かったのを覚えており、材はエンジュかキハダであったのだろう。残念ながら、このスキーを存分に使ったという記憶はない。

石を出し合い、道普請［尋常学校］

間久沢の流れを横断するころから、急な坂道になってくる。今ここに桜を植えてあり、桜の下ではまずイチリンソウが咲く。この花を雨降り花といっていたのだが、なぜだろうか。

参道のイメージ復元にとの思いから、この道を「和歌サ街道娑婆の道」と洒落てみたことがある。看板も「○○会」などという無粋なものは止めて、草花などを詠った万葉集の和歌を書いて立てた。小さな立て看板は表面を焼いて処理し、しばらくの間は風景になじんでいた。

大きなカーブを描いている地点の北側に、昔尋常学校があった。学校はその後下に移り、今は個人の農地になっている。ここから道がまっすぐ伸びて、一番急な坂道となる。梅雨の時期などに大雨が降ると、しょっちゅう砂利が流された。その度に各戸に、ザル一杯の砕石供出が触れ出された。どの家庭でも事前に、家の周りや畑の石を拾っておき、準備しておいた。石を砕いておき、用意しておくのが慣わしであった。敷き均しの道普請は、区民総出のお伝馬作業となった。

雪道のすれ違い［休み石］

尋常学校から少し上ったところ、追分との中間点あたりに休み石があった。道路脇に置かれた縦横50cm、長さ150cmぐらいの石で、２～３人が腰掛けられるくらいの大きさだった。道路改良の際に移動されたものと思われ、現在はない。

この近くに、ホップ園があった。ホップの収穫は８月のお盆前で、地域総出の摘み取り作業となる。当時の小中学生も、猫の手よりはましと駆り出された。ザル一つを持って行けばよかった。収穫量に応じて賃金の支払いがなされ、葉っぱも目方の足しにと収穫を競い合った。中にはザルの底に石ころを入れておくような悪ガキもいて、見破られては大人たちからゲンコツをもらった。

小学校帰りの雪の一本道、友達と雪玉を投げたりしながら歩いていた時のこと。遠くの前方から、パン屋の配達員が箱を担いで歩いてきた。関沢に車を置き、小菅の山根屋商店に配達した、往復４㎞弱の帰りである。恐らく、標的とするようなことを言ったのだろう。様子が普通ではなかった。雪道を広げて踏んで横によけ、行き過ぎるのを待っていた。パン屋は近付くと、足元に箱を置くや否や、私を抱え上げ……。あっという間に、私はホーテキ（降ったばかりの新雪）の中に転がっていた。全身の雪を払い除けながら、下っていくパン屋の後姿がゆがんで見えた。

雪解け水に飲み込まれた学生帽［追分］

追分まで来ると、道はすっかりなだらかになる。山と空しか見えなかったのが、家並が見えるようになる。仁王門が目の前に見えて、もうすぐだという気になる。歩いてきた下の方を振り返り、もうこんなに歩いたんだと一息つく。

春先になると、消防団員たちが危険防止のために、道路沿いの水路に穴を開けた。凍み渡りの子供たちが乗って落ちないようにとの目印でもあった。帰り道に薄くなった雪の壁を長靴で蹴飛ばすと、雪の塊がドサンと落ちた。道路の雪割りもして、砕石のくっついた塊を水路に転がし落とすと、ゴーゴーと音を立てて流れていった。ちなみに飯山市の道路除雪は、58年の春先除雪から始まっている。

57年、小学校入学式の帰り道、６人の新入生がちょうどこの追分まで来たときだった。私の買ってもらったばかりの真新しい学生帽子が、大柄なガキ大将の帽子の上に乗せられたちょうどそのとき。一陣の突風が吹き抜けた。私の帽子はすうっと空を舞い、雪解け水の流れる水路に吸い込まれた。「アッ！」と叫び声が上がり、ガキどもはいっせいに流れを覗き込んだ。残念ながら、誰にもなす術はなかった。一人だけが坊主頭になり、以後ガキどもは無言での帰宅となった。

小学生時代、よく道草を食った。たんぼの中や土手を歩くのは、日常茶飯事だった。ある時、１mほどの高さのたんぼの土手を飛び降りた。下で待っていたのは、畦に植わっていた楮の鋭角な切り株であ

った。もしかしたら、意識的に狙って飛び降りたのでは、とも思う。切っ先はゴムの短靴を突き破り、土踏まずを突き刺した。

みんなと同じように、ズックの靴を履きたかった。親にとっては、ゴムの短靴の方が経済的だと思ったのだろう。靴の中で血が流れ、ヌルヌルと靴の中で足が踊った。怪我の痛さよりも、もうこの靴を履かないですむことがうれしかった。

天地神の交信［仁王門］

仁王門の脇を下って、杉の垣根の向こうに追分が見えたとき、上ってくる少女が目に入った。手に荷物はなく、今までに見かけたことのない人だった。スラリと手足が長く、髪の長さは中ぐらいだった。楚々とした美少女だった……ような気がする。心臓がドキドキと鼓動した。遠くのうちは、頭の先端から履いている靴先まで視線を泳がせた。すれ違うときには、網膜一杯に遠く西方の妙高山が映り、その中に少女が見えた。

写真5　仁王門

どこへ歩いていくのだろうと、気になった。振り返って、後姿を確かめたいという気持ちが揺れ動いた。通り過ぎてしばらくしてから振り返るのと、少女が振り向くのが同時だった。視線と視線がぶつかり、二人の間で大地の神と天空の神が激しく交信し合った。後ろでは、仁王様が目をカッと見開き、睨んでいた。

孫二人と、小菅の里を歩くこととなった。中学の夏休みの宿題は、「ふるさと学習」だという。自分の足元のことは、なかなか知らないことが多いものだ。それなら、と「資料館」へ連れて行くことにした。

資料館には、貴重な文化財や江戸時代からの文書が保管されている。退職して10年ほどになろうとしている私のような年寄りたちが、説明や案内をしたり、管理をしている。無給の、小菅の里学芸員である。

信州大学の学生も、夏休みを利用して大勢勉強に来ていた。すでに顔見知りの学生も多い。研究の専門分野について、孫にひとくさり、講釈してもらうことにした。

「フーン。先祖の皆さんががそれぞれ汗をかき、他所の皆さんから知恵をいただいて、今の小菅があるんだ。」

二人の孫の感想である。お昼は「三平亭」でいただくことにした。菩提院の住職が無住となった民家を預かり、食事を提供している。おいしいご飯と地域食材が評判で、遠くからの来訪者も多い。

支払いは、地域通貨の「えん」を使うことにした。役行者にも因み、住民はみんな地域で一人二役を持っている。住民以外にも小菅に縁とゆかりがある人が多く、祭りやイベント、お伝馬作業などにはその都度参加している。役の報酬や参加活動費は、地域通貨で支払われるのだ。地域づくりはみんなで円く、微笑んでという意味も持たせてある。

今年も暑い夏。2020年８月である。

飯山市埋蔵文化財調査報告　第71集

長野県飯山市小菅総合調査報告書

—市内道路発掘調査報告　第一巻　概要編—

平成17年３月22日発行

発行・編集　飯山市教育委員会

印　　刷　ほおずき書籍㈱